
ラクト・ガール

冥界寺吹雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラクト・ガール

【NZコード】

N1323D

【作者名】

冥界寺吹雪

【あらすじ】

外の世界に干渉しない少女のお話。何十年もの時を図書館で過ごす少女の、日常の変化を描いています。

前編（前書き）

この小説は、上海アリス幻樂団様の制作された『東方プロジェクト』の二次創作です。東方プロジェクトを知らない方向けに執筆致しましたのでご安心下さい。

世界は広い。故に人は歩む。己の足で歩き、己の目で真実を確かめようとする。人間とはそういう生き物である。

しかし、魔女である彼女はそれをしようとはしない。する必要がないのだ。知識を求めて外出する人間達と違い、彼女には既に知識があつた。当然生まれながらにして備わっていたのではない。知識を得る術を知っていたのである。それが本だ。

本には一つ一つに違う世界が描かれている。彼女にとって一冊の本を読むことは、一つの世界に旅立つことと同じだったのだ。

だから彼女は百年間もの間、外の世界から自らを隔離してしまった。

「パチュリー様、紅茶をお持ちしました」

まだ若い、落ち着いた雰囲気の声が聞こえた。

「入りなさい」

「失礼します」

図書館の巨大な扉がギィと音をたてながら開いた。そこにはポットをとカップをのせた台車に手をかけるメイドの姿。

「テーブルに置いておきます。飲み終わる頃に取りにきますので」

そういうと、メイドは丁寧にお辞儀をして図書館を後にした。

パチュリー・ノーレッジ。紫の帽子を被り、青いしましまの寝間着のような服の上から薄手で紫の上着を纏っている。見た目だけいえばまた十歳前後であろうその姿。しかし、彼女は既に百年もの間生き続けている。魔女の寿命は人間より遥かに長いのだ。

パチュリーは巨大な図書館の中央、先程のメイドが置いていった紅茶が置いてあるテーブルに座ると、片手に持っていた本を膝の上にのせて開いた。どうやら紅茶には興味がないらしく、静かに読書を始めた。物音一つしない、静寂の支配する図書館は、誰もいない。パチュリーは表情一つ変えずに黙々当然読書に勤しむのであった。

無音の空間。

薄暗く、本の文字が少々見にくく。もつ夕方のようだ。パチュリーはバタンと本を閉じる。埃まみれだつたのだろうか、本から埃が舞い散り、小さく咳込んでしまう。手で埃をはらうと立ち上がり、照明をつけた。薄暗かつた図書館が赤みがかった光がやわらかく部屋を包む。すると再びテーブルの椅子に座り、本を開いた。

「ゴーン、ゴーンと鐘の音が低く響いた。

「……もう、こんな時間なのね」

呟くように言つと、再び読書を続けた。テーブルには様々な種類の本が、いつの間にか山積みになつていた。

パチュリーはこの生活を何十年と続けている。扉の向こう側へ行くこともなく、ただ本を読み続ける。それが不動の日常だった。これ

からもこの日常が続く。変化することは何一つないだらう、そう信じていた。いや、意識するほどのことですらなかつた。

コン、コン

木材を叩くような乾いた音が、扉の方から聞こえた。1時。紅茶を持つてくるには早過ぎる。

「……誰？」

読んでいた本を静かに閉じ、扉の前まで来るとそう言った。

「ここが図書館つて聞いてきた通りすがりの魔法使い、霧雨魔理沙だぜ！ 実は探してゐる本があつてなー。ちょっと入れてもらいたいんだが」

威勢のいい、しかしまだ少女のような声だった。扉越しにもかかわらず、よく聞こえる。

パチュリーは驚いていた。今まで一度も聞いたことのない声。つまりは、自分の知らない人間がこの扉の向こうにいるのだ。何十年と他人に会うことのなかつたパチュリーにとって、それはまるで宇宙

人にでも会つたかのような気分だつた。

「帰つて」

考えるより先に言葉がでていた。

「そんな、別にいいじゃねーか。減るもんもあるまいし、ちょっとだけ本が読みたいだけなんだ。な？」

「いいから帰つて」

冷たく言い放つた。自分でも何故こんな言葉がでてきたのかわからなかつた。別に図書館に人を一人入れた位で迷惑をするわけでもない。断る理由はないはずなのに、しかしパチュリーは反射的にそう言つた。魔理沙と名乗る少女は、暫くだんまりを続けていたが、場の空氣に痺れを切らしたかのように

「まあいいや。・・・そうだ、名前を教えてくれよ。私も教えたんだしな、それくらいはいいだろう?」

パチュリーは一瞬躊躇つたような表情を見せるが、

「・・・パチュリー・ノーレッジ」

答えた。

「パチュリーか。分かつた。んじやパチュリー、また来るぜ」

そう言つと、パチュリーの返事も待たずには走り去つていつてしまつたようだ。足音が遠のいていく。

テーブルの椅子に戻ると、パチュリーは再び本に目をやつた。

月も星も、薄い雲に隠されてしまった。

前編（後書き）

習作といつことなので、短い文章は『愛嬌』。東方作品を知らない方にも楽しめる作品を目指して。というか、東方作品は今作だけになるのかな？・・・とにかくです。独特の雰囲気を味わっていただければなあと思っています。

明くる日。空は相変わらず雲が覆つており、空からの光を遮断している。薄暗いと、本が読みづらい。仕方なくパチュリーは照明をつけるべく立ち上がった。その時

「パーチュリー！」

耳に響く程大音量の声が扉から聞こえた。

「約束通りきてやつたぜ！感謝しろ感謝！」

「あなたが一方的に押しかけてくるだけじゃない」

「まあまあ、細かい」とは気にしたら駄目だぜ」

反論は無駄だらう。ふう、とため息をつくと、照明のスイッチを入れた。

「今日は何の用なの？」

「だーかーらー、昨日の約束で來たんだって」

「なら帰つて」

パチュリーは冷たくそう言つた。また考えるのよりも先に。暫くの沈黙が続いた後、

「…………わかつたよ。また来る」

暫く扉の前に立ち尽くしていたが、やがてテーブルの椅子に腰をかけ本を開いた。ぶつぶつと何が呟いているよりも見えるが、何を言っているかまでは聞こえない。

「パーチュリー！」

翌日、扉からはまたあいつの声。

「…………今日は何の用なの？」

「やだなーパチュリーったら。分かってるクセにいらからかいにきたのね」

扉一枚を隔てた会話が今日も始まった。

「しつかじこの屋敷、やけにでっかいよなあ。屋敷つてベルジやないぜ」「や

「家には空間をいじるのが好きな人がいるのよ

「そりやまた珍しいやつもいるもんだな。是非会ってみたいぜ」

「そこで待つてれば3時頃には来るわ。紅茶とナイフを持ったメイドが」

「紅茶にナイフ?」の屋敷の人はナイフで紅茶を飲むのかー

「もしくは、侵入者を排除する道具に使うでしょうね

しばしの沈黙の後

「・・・・・[冗談きついぜ?]」

確かめるように疑問符をつける。

「冗談に聞こえた?」

再びしばしの沈黙。

「用が済んだら帰つて」

パチュリーが言つと、分かつたぜ、と答えた魔理沙は扉の前を後にした。テーブルの椅子にいつも以上にゆっくりと腰を掛けると、本を開こうとして、しかしやめた。

「・・・・何なのよ」

独り言のように発した声はやがて空氣に溶け込んで行くかのようになってしまった。

拒むことも出来るはずだ。

パチュリーがもう一度と来るなと言えばそれで済む話なのだ。しかし、パチュリーはそれをしようとはしない。はじめこそ抵抗があったようだが、今では自然な会話が出来ているし、なにより楽しいのだ。これから毎日魔理沙が来たとしても、パチュリーはそれを拒むことはしないだろう。そして友達とまちゅうと違うナビ、色々なことをおしゃべりするだろう。

扉一つを隔てて。

そり、決して会おうとはしないのだ。どんなことがあっても、この図書館を出ることだけはしないのだ。

パチュリー自身でも、その理由はわからなかつた。あらゆる本を探し読み漁つたが、それでも答えは見つからない。仕方なく諦めたパチュリーは、読み途中の本に菓を挟んで閉じると、テーブルに伏した。

「パーチュリー！」

やつてきた。

「・・・・今日は何の用なの？」

「今日は何としても図書館で借りたい本があるんだ。といつことで開けてくれ

「・・・・帰つて」

静かにそう呟いた。

「あ・・・ほら、あれだよ。魔導書が大量に置いてあるんだって

な。そのうち一つでもいいんだ。・・・何なら、私はここで待つてるからパチュリーが持ってくるんでもいいぜ?「

「・・・・帰つて」

答えは変わらなかつた。魔理沙はしばらくパチュリーの反応を待つていたが、パチュリーがこれ以上何もいわなことを悟つて

「・・・・分かつた、また来るぜ

そう言つと、扉の前から立ち去つとする。その時だつた。

「もう来ないで」

呟くよつな、小さな声。

「な・・・・、私が何かしたか?」

「いいからもう来ないで!-!」

魔理沙が、いや、パチュリー本人でさえ聞いたことのない程に声をあらげていた。驚いているのだろうか、扉の外側からは何も聞こえてこない。

「もつ私には、かまわないでよ・・・・

かされた声が静かに図書館に響く。扉の外からの声は無く、ただゆつくりと遠ざかる足音だけが物寂しげに聞こえてくるのだった。

いつの間にか雨が降っていたようだ。シトシトと、冷たい音が響く。

「ン、ン

「・・・誰?」

「咲夜です。紅茶をお持ち致しました」

「・・・入りなさい」

失礼します、と静かに扉を開ける。ポットを持ったメイド姿の少女は一礼し、扉を閉じた。

「おひらにておきます。飲み終わるおひらには取りにきますので

失礼しました、と丁寧なお辞儀をすると扉に手をかける。

「待つて」

突然パチュリーは咲夜を呼び止めた。咲夜は扉を開こうとしていた手を止めた。

「如何致しましたか?」

咲夜は聞くも、パチュリーはなかなか答えようとはせずにただ俯いている。悩んでいるような、悲しんでいるような、憂鬱な表情を浮かべ続いている。

「一つだけ、教えて欲しいの」

やつと、蚊の鳴く程の声でそう言った。

「……人の出会いって、大事なもの？」

意外性のある質問だつたせいか、咲夜は少しうーんと首を捻りながら考えていたが

「大事だと思いますよ。人に出会うことは、自らを成長させることですし。私もパチュリー様に出会えて色々な知識を学びました」

「相手が私より知識人じやなくとも？」

「パチュリー様にとって、それが欠かせない人間なのであればそうだだと思いますよ」

しばしの沈黙。そして

「……ありがとうございます。帰つていいわよ」

「分かりました。では、失礼します」

そう言うと、咲夜は扉を静かに閉めた。図書館にはパチュリーただ一人が座っているのみである。

それから一日、二日と魔理沙が現れるることはなかつた。もう来ないで、なんて言つてしまつたんだから当然といえば当然である。わずかでも期待を抱いていた自分が情けない、もつあいつとも会話することはないだろ？。いつもの生活に戻るだけのことである。何の不安もない。

コン、コン

明くる日、扉を叩く音。

「……誰？」

また咲夜が紅茶でも持ってきたのだろう。パチュリーは本をテーブルに置いて席を立つた。

「あー、パチュリー……」

と、言葉を詰まらせてくる。この声に、パチュリーは聞き覚えがあ

つた。

「……魔理沙？」

いつもの威勢のいい声ではなかつたので一瞬迷つたが、この声は確かに魔理沙のものだつた。

「…………何の用よ」

言いたくもないのについついそんな言葉を漏らしてしまつ。

しかし、魔理沙は何も答えない。パチュリーは不安になり、しかしきかれる言葉が見つからない。一瞬の静寂が支配する。

「…………頼む、部屋からでてきてくれ」

いつになく真剣な声色だつた。

「もう何十年も前からじつに閉じじやつているんだろ。」

パチュリーは何も言わない。いや、何も言えない、言葉がでこないのだ。

「・・・・頼む、一度でいいから、パチュリーに会いたいんだ」

会いたい。そんな言葉、初めて言われた。私に会いたい何て、そんなことを思ってくれる人なんかいないと思っていた。そんなことを考えると涙が止まらなかつた。

ようやく分かつた。怖かつたのだ。自分が生きてきた場所を離れ、外の世界へと飛び出すのが。その勇気がなかつただけなのだ。

所詮私は閉じられた少女。この館に、自身の心に閉じられてしまつた魔女。それが、ラクト・ガール・・・・

ラクト・ガール?「冗談じゃない!」　もう鍵は開いたから。
いつまでも泣いていたつてそこには何もない

「ラクト・ガール!さあ行こう!」のドアを押してくれ　お
前の手を強く握んで必ず持つてくれ・・・・

気がついた時には、パチュリーは扉を開けていた。魔理沙が、パチ
ュリーを必要としてくれた人が満面の笑みを浮かべて立っていた。

「やつと、開けてくれたんだな」

目を閉じながら魔理沙は静かに言う。パチュリーに、もう外の世界
に対する恐怖などない。

「一緒にこいよ。外の世界を案内してやるぜ?」

魔理沙はその手に持つ箒にまたがると、

「後ろ、あいてるぜ？」

何も言わず、パチュリーはその箒の後ろにまたがった。魔理沙の温かさが、服の上からでも伝わってくる。

「じっかり掴まつてろよ~いぐぜー。」

紅く染まった空。外の世界には、溢れんばかりの広大な自然が、紅く写し出されていた。何冊と、いくつもの本を読んでも得られないものが、そこには数え切れないほどたくさんあった。

「な、気持ちいいもんだろ？ 空から見る幻想郷はまた一段と格別だろだろ？」

生き生きとした表情で魔理沙は言つ。パチュリーは少し控えめに、しかし確かに笑っていた。図書館を出る勇気を持てたこと、外の世界に飛び出したこと。そして何より、魔理沙に会えたこと……。

「もつと、遅く飛んで……」

さあ、何処へ行こうか

ここまで読んでいただいた方、ありがとうございました。この作品は、東方プロジェクトの一次創作であると共に、COOL& CREATEさん作詞、編曲の楽曲『ラクト・ガール』の一次創作でもあります。・・・さてと、ラクト・ガール、如何だったでしょうか？東方プロジェクトを知らない方にも楽しんでいただけたのなら幸いです。よろしければ評価をつけていただけると今後の執筆活動において大きな糧になると思いますので、是非ともよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1323d/>

ラクト・ガール

2010年10月8日22時00分発行